「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺
住職 大島祥明

故人を偲ぶことが供養になる

故人に対するいちばんの供養は、故人のことを思い浮かべること、思い出してあげることです。

よく「故人を偲んで」と言いますけれど、口だけで実際に偲んでいないことが多いようです。

故人を語り、思い出し、故人を中心にして会話がなされることが法事の意義です。みんなで和やかに語り合っている場面を、故人は喜んでいるのです。故人もその場にいると思ってください。

「心が大切だ」ということで形は必要ないかというと、そうではありません。形が整うとそこに心が入りますから、法要の形は必要だと思います。

お坊さんにお経をあげてもらうと、場がしまるということはあります。しかし、お坊さんにお経をあげてもらえば、それで供養になったというわけではありません。お坊さんの役目は、お経をあげながら、みんなの気持ちを故人に伝えていると言えましょう。なによりも、**遺族の思い**が大切なのです。

遺族が故人を偲んで思い出すことによって、**「こういうことをしてあげたら、故人はきっと喜ぶだろうなあ」**と考えてする行いは、すべて供養になります。

●PHP研究所刊『死んだらおしまい、ではなかった』より。